

## 「子ども」という鏡

—特集「子どもらしさ」の五論文を読んで—

麻 生 武

### はじめに

「子ども」は私たちの鏡である。誰を「子ども」とみなすのか。「子どもらしさ」をどのようなものとするのか。「子ども」という存在は、私たちが自分たちをどうとらえているのか、それをみごとに映し出す。また、目の前の「子ども」の立ち振る舞いを見ると、そこにはかつての私たちがいる。それだけではない、今の私たちの中にも同じ「子ども」がいるようにさえ感じられてくる。「子ども」という鏡を覗くと、そこには日頃気づかずにいる私たちの姿が映っている。

今回の特集は「子どもらしさ」という鏡を五人論者が覗き、彼らがそこに何を見たのかが論じられている。五人の鏡に対する立ち位置はそれぞれ異なっている。田中理恵氏は「子どもらしさ」を子どもの仲間集団の研究から論じている。池田曜子氏は教室のフィールド観察を基に教員の語る「子どもらしさ」について論じている。師岡章氏は「子どもらしさ」に関する保育学の三人の先達の論を媒介に「子どもらしさ」について論じている。鶴野祐介氏は教育人類学の視点から岩田慶治の論を参考に五つの「子ども性」を抽出している。加藤理氏は北原白秋の童心論や子どもたちのさまざまな替え歌の調査から内的な「子どもらしさ」について論じている（以後五人の論者の敬称は省略させていただく）。

五人の執筆者の論考はいずれも秀逸で興味深い。そこに登場する「子ども」

や「子どもらしさ」は実に多様である。「子ども」を見る側の私たちの多面性と、見られる「子ども」側の多面性とは、相まって五つの論考は、全体としてみるとかなり複雑なものになっている。指定討論者の私の任務は、多くの読者が、なるべく共通するタームで議論できるように足場作りをすることだと考えている。それぞれの論者が、何を見ようとして、実際に何を見出したのか。以下において、五人の論者の視点の共通性や相違点をうまく交通整理整えることができればと願っている。

## 1. すべての議論の暗黙の前提になっている哺乳的「子ども」概念

五人の論者に限らず、ほとんどすべての論者が暗黙裏に共有し合っている、「子ども」概念のコアとなる基礎的な部分が存在する。それは一般的に言えば、生物概念としての「子ども」である。もう少し的を絞れば、哺乳類の幼体と成体との関係である。幼体が生後も成体の母乳によって養育される哺乳類は、幼体が「子どもらしさ」を示す点においても、また成体はその「子どもらしさ」を的確に認知する上においても、「子ども」という意味空間の中心部に位置していると言って良いだろう。「子ども」は「子どもらしく」なければならないのが哺乳類である。「子ども」とは生物学的に広義にとらえると、誕生してから成体になるまでの幼体のことである。成体とは生殖可能になり幼体を生み出すことが可能になった個体のことである。誕生してから成体になるまでの期間が広義の「子ども」期である。哺乳類の場合は、この「子ども期」を、さらに栄養を母乳に依存している段階（乳児期）と、自立して栄養摂取が可能になる段階（狭義の子ども期）に分けることが可能かもしれない。なぜ「子ども」は「子どもらしく」なければならないのか。それは幼体が、成体に母乳や食物を供給され、保護してもらうためである。成体が、幼体を世話しなければ、幼体は生きることができない。幼体は「子どもらしさ」をシグナルとして表出し、成体にアピールしている必要があるのである。身体の小ささや丸みを帯びた頭部や比較的大きな目（瞳）などさまざまな特徴が、幼体の「かわいらしさ」を示すシグナルとして機能する（Lorenz,1943）。また、幼体は身体内部の構造も、成体とは異なっている。骨格や歯の生え方や神経系やホルモン系などの機能と構

造は、成体とは異なっている。その意味で、幼体は生物学的に成体とは異なるシステムであると言ってよい。

哺乳類の話に限るとしても、話はそれだけではない。幼体が「子どもらしさ」を表出することや、成体はその「子どもらしさ」をキャッチする能力があることなど、実際にはそこには個体の学習が複雑に関与している。その学習は多くの場合、仲間との集団生活の中で生じる。学習がうまく成されなければ、幼体は「子どもらしさ」（親を追ったり、親になつくこと）を示さなくなり、成体は幼体の「こどもらしさ」を認識しそれに適切に応答（適切な養育行動をとるなど）できなくなるのである（松沢, 2001）。

また、ヒトは極めてネオテニー的特徴が数多く存在する（モンターギュ, 1986）。ネオテニー（幼形成熟）というのは広義には、祖先の幼体がかつていたさまざまな身体特徴や行動傾向を、その生物の子孫の成体が示すことである。モンターギュ（1986）によれば、脳が大きいこと、頭が丸いこと、歯が小さいことなどさまざまな「身体の構造」も、三歳までに脳が急速に発達すること、出生時の体重が低いこと、発情周期がないことなどさまざまな「機能」も、愛されたい愛したいという欲求、知ることへの欲求、好奇心、驚き心、遊び心、楽天主義など、実に多くのヒトの特徴とされる「行動や心理」も、すべてヒトのネオテニー的特徴にされている。この論の細部の当否はさておくとしても、ヒトという存在が、生物学的に「子どもらしい」という特徴と切っても切れない関係にあることは、確認できるだろう。

ここで確認したかったのは、私たちにとって、コアとなる「子ども」概念の基礎部分は、私たちが哺乳類であるという事実深く根を張っているということである。モンターギュの指摘するように、ヒトは他の哺乳類よりも「子ども」という存在形態に深くコミットした生物だということはおそらく間違いない。本論がスタート時点で、共有された認識のベースとして確認しておきたいのは、このことである。

ではなぜ、モンターギュの議論のように、ヒトのあらゆる事柄がヒトのネオテニー的特徴とされてしまうのか。「子どもらしさ」の話が、際限もなく爆発してしまうのか。おそらく、それは私たちヒトがことばの世界に深く足を踏み入れてしまっていることに関係している。私たちは、確かに哺乳類の一員なの

だが、ことばを媒介にして蓄積されてきた知識やスキルがなければ、もはや子どもを育てることができなくなってしまっているのである。幼体のことを「赤ん坊」「幼児」「子ども」「児童」「生徒」などと、成体のことを「青年」「大人」「老人」などと、区分し名付けるのも、すべてことばのなせる技である。ことばのせいで、私たちは「子ども」とは何か、「子どもらしさ」とは何か、とうとう自問するようになってしまったのである。そして、モニターギユのように、ありとあらゆるヒトの特徴に「子どもらしさ」を見出すことさえ可能になってしまったと言えるだろう。

聖書にも、論語にも、「子ども」の話はでてくる。その頃から今日に至るまで、養育論・保育論・教育論を端緒に、医学・生理学・発達心理学・社会福祉学・社会学などの学問の興隆と相まって、子どもに関する議論は、一筋縄ではとらえきれないほど複雑に分化し、互いに絡み合うようになってきているのである。異なる学問を背景にした専門領域の異なる者同士が、共通の地図を持たぬままにいたずらに「子どもらしさ」について議論しても、自分たちがいったい何を議論しているのか見失う危険性があるだろう。「子ども」といったい誰のことなのか、「子どもらしさ」とはイメージのことなのか実体のことなのか、また何のための議論なのか。議論が錯綜し非生産的に混乱することを避けるには、各々が自分の立ち位置と目指す目的地の方向を示す、互いに共有し合う一つの地図を持つ必要があると言えるだろう。そのような地図は一朝一夕で作れるものではない。本論はその準備となる手探りの試行である。

この小論の意図は、議論の視点の在り方を交通整理して、少しでも糸がもつれて絡み合うのを避けることにある。とは言え、私たちには、議論がもつれたときに帰るべき原点がある。それは、私たちの中にセットされている哺乳類の感性である。それを身体の中から呼び起こすことである。目の前にいる存在が、子どもか否か、身体が反応して示してくれるはずである。そのとき目の前にいるのが私にとっての「子ども」である。反応の在り方に個人差があるにしても、私たちすべてが、このこと（内容ではなく構造）を、共有し合っていると行ってよいだろう。そのことを確認して、混乱の渦巻くロゴスの世界に足を踏み入れて行くことにしたい。

## 2. 研究対象の三つの区分(“实在”・“アイデア”・“関係性”としての子ども)

五人の論者はすべて、存在として「子ども」のことは生活レベルでは熟知している。五人の論者がそのベースとなる現実認識で食い違うことはおそらくない。しかし、どのような「子ども」を研究対象にしているのかということに関しては、五人が一致しているわけではない。私は、研究対象としての「子ども」は、次の三つのタイプに分けられるのではと考えている。一つ目は「实在」としての子ども」、二つ目は「アイデア」として子ども」、三つ目は「関係性」としての子ども」である。同じ「子ども」といっても、研究の焦点の当て方がまったく異なるのである。以下に、順に説明を加えていくことにしたい。

### 2-1 “实在”として子ども

「实在」としての子ども」というのは、別段難しいことを意味しているわけではない。普通に一般に一般の人たちが、観念ではなく行動において「子ども」とみなしている子どもたちのことである。今日の日本では、乳幼児、就学前児、児童、生徒などと呼んでいる子どもたちのことである。

#### <田中の論考より>

当然のことだが、五人の論者はすべて、“实在”としての子どものことを念頭におき、またその実際の活動を観察したり記述することも行いつつ、研究や論述を行っている。しかし、全員が必ずしも“实在”としての子どものことを知ろうとして研究を行っているわけではない。よって、「子どもらしさ」を論じるにしても、そこに大きな違いが生じる。今回の五論文の中で、“实在”としての子どものことターゲットして、“实在”としての子どものを知ろうとして論を構築しているのは、田中理絵氏一人であった。彼女が「子ども社会とは何か」と問い、ギャング・エイジの仲間集団関係をリサーチし研究したり、中学生や高校生の調査実験を行っているときに対象となっているのは、まさに“实在”としての子子どもである。また、知ろうとしているのも“实在”としての子子どもである。そこに矛盾はない。

しかし、その議論の途中に、大人の視点を越えた「子ども独自の社会」の話が入ってくるので、話は単純ではない。大人には見えない<子ども>、つまり

の「子ども独自の社会」が存在すると考えられるのではないだろうか、田中 (2016) は問うのである。もちろん、それは存在するだろう。それこそが“実在”としての子どもではないか、と私は思うのだが、田中の考えは微妙にニュアンスが異なるようなのである。田中の議論に、土戸 (1999) の三つの次元①「現実の子ども」、②「イメージとしての子ども」、③「大人に見えない子ども」の話が混ざるあたりから、私には田中の論旨が見えづらくなる。どうも、本論で言う“アイデア”としての子どもの話が、“実在”としての子どもの話と、混ざってしまっているようなのである。とは言え、田中が実際の研究の対象とし、かつその生態を明らかにしようとしているのも“実在”としての子どもであることははっきりしている。今回五人の論者の中で、“実在”としての子どもを、研究対象として、その対象をより深く知ろうとしているようなスタンスの研究者は、田中一人であった。とは言え、心理学や発達心理学や実証主義的社会学などでは、そのようなスタンスは極めて標準的なオーソドックスな態度である。多くの心理学者や社会学者が、目の前の“実在”としての子どもをとらえようとして、日々研究活動を行っていることは確かである。

しかし、本当のことを言えば、“実在”としての子どもをとらえることはそうたやすいことではない。住田 (1995) の「子どもの仲間集団」の研究などごく一部の優れた研究を除けば、既存の多くの研究がはたして、どこまで“実在”としての子どもに肉薄できているのか、少し心許ないようにも感じられる。“実在”としての子どもをとらえようとする研究には、まだまだ大きな発展の余地が残されていると言ってよいだろう。

## 2-2 “アイデア”としての子ども

本論で“アイデア”としての子どもを対象とした研究として分類したのは、五人のうち三人、師岡、加藤、鶴野らの論考である。“アイデア”としての子どもを対象とした研究と、“実在”としての子どもを対象にした研究とはどこがどう違うのだろうか。生身の現実の子どもたちの生態を重視し、生の子どもの姿をとらえようとしている点においては、両者の研究に大きな違いはないように見える。その相違点のはっきりしてくるのは、「子どもらしさ」に関してである。

“実在”としての子どもを対象にした研究の立場からすれば、「子どもらしさ」とは、研究に先立って存在する概念ではなく、研究結果の分析によって、初めて見えるようになる事後的な「子ども」の属性である。大学生と中学生を比較した際に、また中学生と園児とを比較した際に、なぜ大学生より中学生の方が「子どもらしい」のか、なぜ中学生より園児の方が「子どもらしい」のか、まずさまざまな行動特性やコミュニケーション行動を細かく比較検討していく必要がある。単にさまざまなスキルが未熟であること、知識が不足していること、運動能力が劣っていること、それらを「子どもらしい」と表現することも可能だが、一番適切な「子どもらしさ」の用い方は、さまざまな未熟性をマイナスとするのではなくプラスの要因として活用する進化論的な適応方略こそが、「子どもらしい」ということになるのではないだろうか。たとえば、ディーコン(1999)は、子どもが言語を獲得できるのは、言語習得期に記憶力が弱くて概括的にしか物事をとらえることのできない情報処理能力の未熟さのおかげとして位置づけている。その意味で、片言を話している乳幼児の行動はきわめて「子どもらしい」と言えるだろう。そのような視点からとらえると中学生の「子どもらしさ」は、そのホルモン系の活性化と前頭前野の(髄鞘形成の)未熟さが、どのような生存方略を見出しているのか、実証的に探求することによって明らかにされることになるだろう。

#### <師岡の論考より>

“アイデア”としての子どもを対象にした研究の立場からすれば、「子どもらしさ」とは、そのような実証研究によって明らかにされるようなものではない。「子どもらしさ」とは端的に言えば、私たち大人が失ったものである。よって、「子どもらしさ」を語る側に、懐かしさや郷愁の感情がそこはかたなく存在している。師岡(2016)が、近代教育学や保育思想の礎を築いた「ルソー、そしてフレーベルの子どもの捉え方はロマン主義的な色彩を持つものであり、受け止める側は概して情緒的に理解しがちである」(p.47)と述べていることも、ほぼ同じことを指していると言えるだろう。「子どもらしさ」には、ほとんどの大人が失ってしまっている「善良さ」「遊び心」「感動する心」「純粋なもの」などが自ずと数え上げられるはずなのである。

師岡は倉橋惣三、周郷博、久保田浩という三人の保育学の先達をあげて、彼

らがどのような「子どもらしさ」を取り上げたか紹介している。それによれば、倉橋は、暑さにもめげず物事に没入している幼児の姿を「涼しい顔」とその「子どもらしさ」を表現したり、急に飛びついて来て、あっと思うまもなく駆け去ってしまう幼児の姿に「子どもらしさ」見出したりしている。周郷は、子どもの内面に潜む力こそが、子どもの成長を促すものだととらえ、おそらくそのような潜んでいる力を感じさせるような立ち振る舞いに「子どもらしさ」を感じ取っていたのだろう。久保田は、子どもたちの遊びを観察し、その年齢の子どもたち特有の振る舞いの中に「子どもらしさ」をとらえている。倉橋も周郷も久保田も、現実の子どもたちの接し子どもたちをよく観察し、これから発達し成長して行くべき子どもたちの生命が宿している「子どもらしさ」を、愛らしく思いつつ、かつそれを育てていかなければとの思いを強く抱いていたと言えるだろう。

#### <加藤の論考より>

同じ「アイデア」としての子どもを対象にしても、加藤（2016）の立ち位置は師岡とはかなり異なる。それは、師岡があくまでも保育という実践現場を背景に、保育の中で保育者がとらえなければならない「子どもらしさ」を軸に、「子ども」について語っていたのに対して、加藤の視点は「児童文化研究」に立脚しているからである。加藤によると「児童文化研究」にも実にさまざまな視点があるという。今回の論考では、加藤は北原白秋（1885-1942）の「童心」論を中心に「子どもらしさ」について論じている。それによると、白秋は、子どもの本性を「純心」で「凡ての感動が新鮮」で「正直」なものとしてとらえ、「童心を豊かに保持した姿こそ人間の理想的な姿」である考えたという。では、子どもには必ず童心があるのかと問えば、白秋はそうは考えてはいなかったようである。「子供は大人の模倣をする時に嘘を云う」（加藤の引用による）と述べているからである。どうも童心とは大人が手本にすべき心の持ちようのようなのである。

加藤によると多胡齒羊（1900-1979）は童心（わらべごころ）について次のような説明を行ったという。「率直に物を観る」「白紙の態度で物を観る」「色眼鏡をかけずに物を観る」「私ごころなくして物を観る」「感激を以て物を観る」「新鮮に物を観る」「第一印象を以て物を観る」「馴れきらないで物を観る」、こ



れらが童心である。多湖の主張は、童謡を創作したり鑑賞するにはこのような童心が不可欠だという点にある。まさに“アイデア”としての童心である。はたして子どもが実際にそのような視点でものを見ているか否かは、まったく問題にされていない。まるで現象学的還元によって判断停止して、世界を観ることが童心と名付けられていたようである。しかし、話はそう単純ではない。童心なるものがあるとされると、現実の子どもに童心があるのを証言する論者も現れてくるのである。加藤によると、石丸梧平 (1886-1969)・喜世子 (1891-1965) 夫妻は、自分たちの四人の子どもを観察した上で、「子どもの本性を「純で、正直で、真実そのもの」と認識し、「子供は子供それ自身の世界」を持って大人には解しがたい子ども独自の子ども性をもっている」(加藤, p.82) と語っている。

今回の加藤の論で興味深いのは、童心批判の批判の担い手として白秋の同時代の童謡作家スズキヘキ (1899-1973) を紹介している点である。綴り方教師やプロレタリア作家の童心批判は、“アイデア”としての子どもではなく、“実在”としての子どもを見よということにつきるだろう。スズキの批判も同じラインだと言えなくもない。しかし、「実際のありのままの子ども子どもを見る」というのは、どのようなことを意味するのだろうか。「実際のありのままの子ども」を見るという志向を貫徹することは、それほど簡単なことではない。もちろん、スズキにそのようなことが可能だったわけではない。スズキの感性が鋭かったのは、現実の子どもたちの囁きことばの中に童心を見出した点である。スズキは理想化した子どもの心性を創作目標とする「童心主義」を否定する。しかし、現実の中に現象している童心には忠実たろうとするのである。しかし、そこには、別の“アイデア”としての子どもが出現するのである。それは、理想化された子どもではなく、子どもの原初的な存在の在り方、「無垢なだけではなく残酷で時には悪口も言う“実物の前の童児その姿”」である。子どものある一面がアイデア化されるという点は、北原白秋とスズキヘキとの間に根本的な違いはないのかも知れない。

白秋はスズキが指摘したような側面も十分意識していたようなのである。加藤からの引用になるが、白秋は次のように語っている。「彼等は全く好奇心に富んでいる。残酷なことも敢えてする。しかし、彼等は盛んに成長しつつある。

じっとしてられない。彼等の身边には常に清新な生物とその生々しい色彩をもって圍繞されていなければならない。彼等は真に彼等の遊び相手たる生物共に愛する、飽きる、殺す。そうして「いよいよ彼等は太る」と。白秋にしても、スズキにしても、「子どもらしさ」や童心とは、現実の子どもたちが隠しもっているはずの“アイデア”なのである。それを理解することが重要なのは、童謡などの創作や鑑賞において、それが不可欠の媒介だからである。

現在を生きる加藤 (2016) は、彼等とは少し違った視点を持っている。彼は、白秋が童心とは別のものとしたにもかかわらず、裏口から童心に数え上げたような「誇張や出鱈目や想像の機知」の中に、現在の童心の生き方形が見られるのではないかと考えたのである。そこから発想した研究が、大学生を対象に小学校低学年の頃に替え歌の採集とその分析である。加藤は、小学校二年生頃には現実と空想との区別がつかないから、そのような「誇張や出鱈目や想像の機知」に富む替え歌が盛んになるのだらうと考察している。論の進め方が少し強引であるようにも思われる。それは、「現実と空想との区別がつかない」といったことが、いったい何を意味しているのか明確化することはかなり難しいことだからである。いずれにせよ、さらなる実証的研究が期待されるテーマだと言えるだろう。興味深いのは、加藤の議論が、歴史的なメタ研究としては“アイデア”としての子どもを対象としつつ、現実の「子どもらしさ」の研究においては“実在”の子どもを対象としているように見える点である。

おそらくこのことは、加藤が研究の既存のフレームを破ろうとしていることから生じていることなのだろう。そのチャレンジ精神に期待したい。子どもたちの替え歌というのは、“実在”の子どもを探索研究する上でも非常に興味深いテーマである。そこには、子どもたちの生きる時代や社会制度を含む生活背景も色濃く反映されていると想像されるからである。おそらく、それは単に「子どもらしさ」の反映と言った単純な理解ではすまない問題であるように思われる。

#### < 鶴野の論考より >

五人の論者の中で誰よりも、“アイデア”としての子どもを正面から直視しているのが、鶴野 (2016) である。“アイデア”としての子どもというのは、“実在”としての子どもから遊離した単なる観念の子どもではない。それは、さまざま

な現実社会の中に存在し機能しているのである。多くの社会で人々は、“実在”としての子どもを見つめるとき、その背後に“アイデア”としての子どもも二重写しに見てしまうのである。いったん、子どもの背後に“アイデア”としての子どもを見ることができるならば、壮年や老人の背後にも同じ“アイデア”としての子どもが潜んでいるのが見えるようになるのである。それが、おそらく鶴野の言う「インナーチャイルド（内なる子ども）」である。子どもにはさまざまな象徴的な意味がまわりついているのである。儀式や儀礼や祭りにおいて、子どもにさまざまな役割が与えられるのもそのためである。

加藤（2016）の紹介する北原白秋を初めとする「童心」論者と、鶴野（2016）や鶴野の紹介する岩田慶治らとは、同じように“アイデア”としての子どもをとらえようとしているように見えるが、両者の姿勢は大きく異なっている。白秋たちにとって「童心」というのは、探索すべきものではない。それはすでに直感的に理解されているのである。その童心を創作活動や作品の読み取りに生かすことが課題なのである。今回の論考において鶴野は全面的に文化人類学者である岩田慶治の論をベースに議論をしている。以下、岩田と出てくる言説はすべて鶴野の紹介と引用によるものである。岩田にとって、童心どころか、子どもそれ自体もある意味で謎なのである。岩田は「子どもというものの在り方、その存在が、私には、まだよく分からないのである」と語っているという（鶴野、p.64）。よって、鶴野は岩田の著作をめくりながら、「子どもらしさ」とは何か、“アイデア”として子どもの特性（子ども性）を探索し始めるのである。これは白秋らの態度にはまったく見られなかった、教育人類学者的な態度だと言えるだろう。

鶴野が見出した「子ども性」（子どもらしさ）は、次の五つである。一つ目は、「フィジオノミックな知覚」である。通常、発達心理学ではこの用語は「相貌的知覚」と訳されている。さまざまな外界の様相に表情的な意味を読み取ってしまう知覚のことである。二つ目は、時間に手で触れることのできる（タンジビリティ）といった時間認識である。岩田によると、伝統社会にはそのような時間認識が存在している。鶴野は、同じ時間認識が子ども性の特徴付けているのではないかというのである。三つ目が、「シンパシー」である。これも伝統社会の「共有する時」と同じものではあるが、子ども性の特徴付けていると

みなしている、四つ目が、陶酔や酩酊や面白さによって生じる「エクスタシー」である。身体運動に面白さを感じ、そこにエクスタシーを感じることで、それが第四の子ども性だというのである。それは、日常的な意味づけや世俗的な秩序から逸脱し離脱するときに生まれるときに感じる解放感であり、子どもの遊びにも大いに見られるものである。鶴野はこれを「ナンセンスへの志向性」とも名付けている。最後の五つ目が、「アニミズム」である。「岩田（2000）が強調しているのは、すべての自然物に生命潮流を感じる古くて新しいエコロジー的感覚である。子どものアニミズムの問題は、「命（いのち）」とは何かという大きな問いに深く結びついているのである」（麻生，2007，p.181）。このようにまとめても鶴野の主張と大きく食い違うことはないように思われる。

### 2-3 “関係性”としての子ども

“関係性”としての子どもを扱った研究として、すぐに念頭に浮かぶのが、本学会の研究奨励賞を授与された元森絵里子氏の著作『「子ども」語りの社会学：近現代日本における教育言説の歴史』（2009）である。その書物の帯には少し怪しげな表現が用いられている。「子ども」とは虚構であり、実体である」と書かれている。この書物には「子どもが語る」ことを分析した部分もあるが、主たる論考は「子どもを語る」ことを歴史的に社会的に分析した部分にある。その部分に限って話をすすめる。元森は決して「“実在”としての子ども」を探求しようとしているわけではない。また「“アイデア”としての子ども」をとらえようとしているわけでもない。人々が「子ども」ということばをどのような意味を込めて用いたのか、誰を「子ども」とみなし誰を「子ども」とみなさなかったのか、そういった近現代における言説の歴史を分析したのが元森の書物である。たとえば、戦時下において、「子ども」は少なくなってしまう。それはそれまで「子ども」とされていた者が「少国民」に格上げされ、より「大人」扱いを受けるようになるからである。このような研究を、「関係性」として子どもを対象とする研究と位置づけておきたい。

今回の五人の論者で、“関係性”としての子どもを対象として研究を行ったのは池田（2016）一人であった。池田の研究は、本来は、“実在”としての子どもを対象としている。小学校や中学校のクラスの中に入り込み、参与観察を

しつつ、個別インタビューなどを活用して、子どもたちの仲間関係を分析するのが池田の研究手法である。今回の論考は、子どもたちの仲間関係を調査研究している際に、それを側面から補強するデータとして、教員に聞き取りを行っていたことがきっかけになって、“関係性”の視点から執筆されている。今回の研究で、池田が見出したのは、驚くべき事実である。

### <池田の論考より>

池田が見出したこととは、小学校教員 A (小三担任 50 代女性)、中学教員 B (中二担任 30 代男性)、高校教員 C (高一担任 30 代女性) の三人が語った、「好ましい子ども」のイメージや、「問題があるとされた子ども」のイメージが、ほぼ教員の性別や年齢や教えている子どもの学年にかかわらず、ほぼ共通していたことである。どの教員も「多少問題行動が伴っていても、率直で元気があり一緒に笑ってしまうような子どもを可愛いととらえ、好ましいと感じていることがみてとれる」(池田, 2016, p.27) というのである。反対に「問題があるとされた子ども」は、小学校教員 A によれば、「自分をほとんど出さず他の子どもに合わせて行動する」(p.29)、「クラスの誰からもよい子だと言われ嫌われることなど想像もできない」(p.29) 子どもなのである。その態度が子どもっぽくないとされるのである。中学教員 B が語るのは、普段は成績も良く教室であまり目立たない存在だが、クラス内でうまく仲間集団に入れない子どもや積極的に関わるができない子どもである。そのような子どもが、問題のある子どもとみなされている。高校 50 代の国語担当の学年主任 D は、それまで金髪にしていた男子生徒が髪を黒くしたことを、「急に目立たない色の髪型にするのは、反対に何か問題を抱えているからじゃないかと思って」(p.31) と語っているのである。

池田が見出したのは、「子どもらしい」とされるフレイミングが、校種の差異に関係なく教員に共有されていたことである。調査人数は多いとは言えないが、厚いフィールドワークを背景にした聞き取り調査である。池田は、教員に直接に「子どもらしいのはどんな子ですか?」「気になる子はどんな子ですか」など聞いているわけではない。たまたま、教師がインタビューの中で語ったものを分析しているのである。さらに驚くべきは、池田が、子どもたちに対する仲間関係についてのインタビューを分析して、小中高の子どもたちの側にも、

同様の「好まれる子ども」に関するフレミングが存在していることを明らかにしている点である。どういう子どもが「好ましい」と仲間から歓迎されるか、仲間関係の中心にいる子どもたちと、周辺にいる子どもたちとの間にも、大きな齟齬がないようなのである。

現在の日本の子どもは、そのまま「子どもらしい」わけではない。「子どもらしく」努めなければ、「大人びて可愛くない」と教師や仲間になさされるのである。「関係性」として子どもを生きることは、それほど単純なことでも簡単なことでもない。池田の論考は、教育関係者にぜひ読んでもらいたいように思う。それは、子どもたちの抱えている暗黙の空気の重さや圧力を少しでも理解して欲しいからである。

### 3. 研究対象の二つの側面（“見えるもの”と“見えないもの”）

これまで論じてきたのは、研究対象としての子どもが、「“実在”としての子ども」、「アイデア”としての子ども」、「“関係性”としての子ども」の三つである。これは対象として分類である。この分類とは、ほぼ垂直な分類軸がある。それは「子ども」というものを“見えるもの”としてとらえるのか、“見えないもの”としてとらえるのかという軸である。“見える”子どもとは、外在として子ども、“見えない”子どもとは、内在としての子どもと言い換えてもよい。

「“実在”としての子ども」を対象として研究するとしてしよう。子どもの言動や立ち振る舞い表情を観察することによって、それをとらえることができるように思うかも知れない。しかし、“実在”としての子どもが、何を感じて何を考えそのように振る舞っているのか、その行動の内在的な論理や感情の流れを、そう簡単に、外からの観察で理解できるわけではない。それをとらえようとする志向性が、“見えない”子ども、つまり内在としての子どもを理解しようとすることである。同じような「“実在”としての子ども」を対象として研究としても、外在としての子どもに留まるのか、内在としての子どもにまで肉薄しようとするのかで二つの方向が存在するのである。今回の田中（2016）の研究や池田（2016）は、どちらかと言えば外在としての子ども、“見える”子どもをしっかりと見ようとする立場だと言えるだろう。アメリカの発達心理学者の多

くは、外在としての子ども理解を志向し、ワロン (Wallon, H., 1879-1962)、ウェルナー (Werner, H., 1890-1964)、ヴィゴツキー (Vygotsky, L.S., 1896-1934)、ピアジェ (Piaget, J., 1896-1980) といったヨーロッパ的な発達心理学者は、内在としての子ども理解を志向していたように思われる。

「アイデア」として子どもを対象とする研究は、「アイデア」なのだから当然、「見えない」子どもと、つまり内在としての子どもを理解しようとしているように思われるかもしれない。だが、必ずしもそうではない。それは、いくら思弁を重ねても「アイデア」としての子どもは必ずしも見えてはこないからである。「見える」子ども、外在としての子どもに肉薄すればするほど、「アイデア」としての子どもが理解できるといったこともありうるのである。北原白秋など童心論の中心人物たちは、「見えない」子ども、つまり内在としての子どもを直感の力でしっかりとらえようとしていたのではないだろうか。内在としての子どものイメージをしっかりと思い描けば、「アイデア」としての子どもは把握できるのだと信じていたように思う。加藤 (2016) の紹介を読むとそのように強く感じる。

それに対して、師岡 (2016) の紹介する倉橋惣三、周郷博、久保田浩という三人の保育研究者は、すべて外在する子どもたちの中にこそ、「アイデア」としての子どもが具現しているのを見ていたように思われる。具体的な子どもの立ち振る舞いの中にこそ「アイデア」としての子どもが躍動しているのである。そのためには子どもを「見る」必要があるのだ。鶴野 (2016) や鶴野の紹介する岩田慶治らは、つまり文化人類学者は、「見えるもの」通じて「見えないもの」を見ようとする志向性、外在としての子どもに留まらず、内在としての子どもにも迫ろうとする欲張りな志向性を、強く持っているように感じられる。そのあたりが、童心論者や保育研究者との大きな相違点ではないだろうか。

#### 4. 研究の志向性（社会との関連における）

以上に論じてきた、「实在」としての子ども、「アイデア」として子ども、「関係性」としての子ども」という対象の三つ区分をX軸の区分、内在としての（「見えない」）子どもか、外在としての（「見える」）子どもか、どちらの

側面を志向するののかということも Y 軸の区分とすれば、研究の志向性が構築(制度の改革)にあるのか、それとも脱構築(制度の相対化)にあるのかという第三の Z 軸の区分が存在する。

同じ子どもを論じるにしても、構築(制度の改革)か脱構築(制度の相対化)では雰囲気はずいぶん異なる。たとえば、師岡(2016)らの保育研究者の志向性は、明確に制度の改革(構築)を目指している。よりよい保育を生み出すための、子どものための研究なのである。加藤(2016)や鶴野(2016)の研究は、おそらくそのような短期的なプランを考えたものではないだろう。方向性としては、制度の相対化、脱構築といったことを射程に入れているように思う。そのような批判の精神が研究のベースにあると言えるだろう。エスノメソドロジーの流れを汲む子ども研究[たとえば山田(2016)]も、そのような志向を強く持っていることはまず間違いないだろう。今回の池田(2016)の論考もそのような流れの中に位置づけることが可能のように思われる。

田中(2016)の研究がどちらの志向性を強く持っているのか、私には今回判断できなかった。制度の改革(構築)のための研究と、制度の相対化(脱構築)のための研究とどちらが、良いとか悪いといった問題では決していない。言うまでもないが、どちらも大切な研究である。必要なのは、自分や相手がどの立場に立っているのかをしっかりと理解し合うことである。さまざまな異分野の研究者が、子どもをめぐる生産的な議論を行うためにはそのような自己認識、他者認識が大切であるように思われる。

## おわりに

最後になるが、私自身のことを以上のフレームを用いて少し紹介しておきたい。それは読者の方々にもそのような自己分類をしていただきたいからである。実際に自分に適用してみれば、本論の分類の適切さや不適切さがよく分かると思うからである。

私は、発達心理学を専門として、幼児の初期コミュニケーションや自己の発達を研究している。目下、一人称の成立に関して論をまとめようとしているところである。X 軸に関して言えば、私は“実在”としての子どもの対象として



「子ども」という鏡  
 ー特集「子どもらしさ」の五論文を読んでー

研究を行っている。Y軸に関しては、“見えない”もの、つまり内在としての子どもを捉えたいと願っている。そのためには徹底的に“見える”ものを見なくては考えている。“見えない”ものとは、たとえば子どもがくわたりし>という意識をもち世界を見つめることである。それは、推定はできても観察することではできない。そのような“見えないもの”を見たいと願っている。Z軸に関しては、制度の相対化(脱構築)を志向していることになる。なぜならば、多くの通俗化した発達心理学は、“見えない”ものを見ようとはしないドクサだと感じているからである。

このようにそれぞれの研究者が、相互の立ち位置を理解した上で、コミュニケーションすれば、さまざまな視点の円環の可能性(たとえば、“実在”としての子どもの“見えないもの”を追求していくことと、“アイデア”としての子どもの“見えるもの”を追求していくこととは、極限のどこかにおいて繋がっているようにも感じる)が生まれるのではとの夢を抱いている。もちろん、今回のフレームが不十分であれば、それを適切に修正することを前提にしての話である。今回の特集を皮切りに、さまざまな学問分野の研究者が集まっている「子ども社会学会」ならではの深い学際的交流が、「子どもらしさ」をめぐる議論から生まれてくることを期待したい。

#### 引用文献

- 麻生武 2007『発達と教育の心理学：子どもは「ひと」の原点』 培風館
- ディーコン, テレンス, W. (金子隆芳訳) 1999『ヒトはいかにして人となったのか：言語と脳の共進化』 新曜社 (Deacon, T.W. 1997 *The symbolic species: The co-evolution of language and the brain.* W.W.Norton & Company.Inc.)
- 池田曜子 2016「再生産される「子どもらしさ」：好ましい子どもをめぐる語りから」『子ども社会学研究』, Vol.22, 19-40.
- 岩田慶治 2000『死をふくむ風景 私のアニミズム』 日本放送出版協会
- 加藤理 2016「生成の源としての子どもの内的宇宙と「こどもらしさ」についての考察：北原白秋の「童心」論と「誇張や出鱈目な想像や機知」を中心に」『子ども社会学研究』, Vol.22, 77-97.
- Lorenz, K. 1943 *Die angeborenen Formen möglicher Erfahrung.* Zeitschrift für Tierpsychologie, 5, 235-4monn09.
- 松沢哲郎 2001『おかあさんになったアイ』 講談社
- 師岡章 2016「保育と子どもらしさ」『子ども社会学研究』, Vol.22, 41-59.
- 元森絵里子 2009『「子ども」語りの社会学：近現代日本における教育言説の歴史』 勁草書房
- モンターギュ, A. (尾本恵市・越智典子訳) 1986『ネオテニー：新しい人間進化論』 どうぶつ社

(Montagu,A. 1981 Growing young. Maglou Hill Co.)

住田正樹 1995『子どもの仲間集団の研究』九州大学出版会

田中理絵 2016「子ども社会とは何か：ギャング・エイジの仲間集団研究」『子ども社会学研究』, Vol.22, 5-17.

土戸敏彦 1999『冒険する教育哲学』勁草書房（※引用は田中（2016）による）

鵜野祐介 2016「岩田慶治の見た「子どもの宇宙」：教育人類学からの「子ども性」の探求」『子ども社会学研究』, Vol.22, 61-76.

山田富秋 2016「古田足日の原体験論・原風景論：社会学的視点からの解読」増山均・汐見稔幸・加藤理（編）『ファンタジーとアニメーション：古田足日「子どもと文化」の継承と発展』pp.60-84. 童心社